2017年３月５日 上越タイムス　に
「じょうえつ外国人医療支援プロジェクト」の活動が　掲載されました

「じょうえつ外国人医療支援プロジェクト」は通称を 頚城方言の「じょんのび」と「医療支援」をあわせて
「じょんなび JOMNavi（Joetsu Medical Navi）」としました

じょうえつレポート 164

「言葉の壁」の解消へ

外国人医療支援プロジェクト

体制整備に向け準備

上越地域　昨年夏に組織発足

訪日外国人の増加に伴い、全国の医療機関で外国人患者の受け入れ体制を整備する傾向が高まっている。都心では2020年に東京五輪・パラリンピックを控え、その動きは加速。およそ1600人の外国人が暮らす上越地域でも「じょうえつ外国人医療支援プロジェクト」が発足し、体制整備に向けた準備が着々と進んでいる。（竹田悠理記者）

同プロジェクトは、外国人と医療機関の間で生じるコミュニケーションギャップの解消、安心・安全な暮らしのサポート体制の構築などを目指し昨年夏に発足した。

官民学でメンバー構成

メンバーは、上越国際交流協会会員や上越、妙高両市の関係課職員、県立看護大の教授らで構成され、日本を含め4カ国の医師および上級国際臨床指導医資格を持ち、退職後もボランティアで欧米やアジア諸国などで国際保健医療協力を行ってきた倉迫忠俊さん（74）が代表を務める。「困ってる人が来てから考えるのではなく、体制を整え準備をしておくことが大事。少なくとも2年後にはある程度の見通しを立てたい」と話す。

定期的に市民プラザの国際交流センターで会議が行われている（上越国際交流協会提供）

伝わりにくい症状や意図

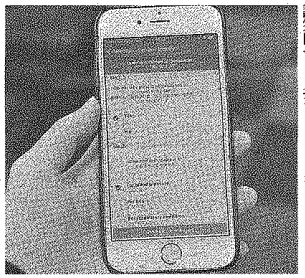
1次調査では「現状と問題点を把握」するため、上越医師会、上越歯科医師会、上越薬剤師会などに所属する医師、歯科医師、薬剤師らのほか、上越地域在住の外国人を対象にアンケートを実施。回答があったうち上越医師会の半数以上では、外国人患者とのコミュニケーションの面で「問題があった」とし、外国人からは「薬の説明書が読めない」「問診票が分からない」「『すきすき』などの『痛みのニュアンスや重症度を伝えるのが難しい』という意見が上がった。

また、婦人科の受診など症状によっては「友人に訳してもらうのには抵抗がある」という声や、通訳のため毎回友人について来てもらわなければならないことから、通院をためらってしまうなどデリケートな問題も浮上し、医療現場における「言葉の壁」の厚さが浮き彫りになった。

現在は「どのようなサポートが必要か」を見定める2次調査の段階で、メンバーは班に分かれ各病院でインタビューを行っている。2次調査が終わり次第「地方自治体でできること」「民間団体でできること」「個人でできること」を関係機関と話し合い、賛同者や協力団体を募っていくという。

通訳システム導入提案も

活動の例としては、日本の医療保険システムなどの多言語案内や、「指さし会話帳」の作成など、あくまで各病院の必要に応じた支援・サポート。そんな中、倉迫さんが最も問題視しているのが「通訳」の問題。労力を費やし、人員を拘束してしまうこれまでの「人を派遣する」形から、電話による「遠隔通訳」という形へ、システムの導入に向け自治体に提案していけたらという。


近年は医療に特化した翻訳アプリも多々あるが、簡単な症状は伝えられても円滑なコミュニケーションは困難

上越地域の在住外国人の数は上越市で1117人（平成28年12月末）、糸魚川市で319人（平成29年2月末）、妙高市では229人（平成28年3月末）。「誰もが安心して暮らせるまち、旅行できるまち」へ、今後の活動に期待が掛かる。